



烏帽子山千本桜は圧巻

新潟市 藤田 秀雄

私達「文学友の会」は、月に二回、地区のコミュニティセンターにおいて主に古典を読むサークルで、会員数は二十五名程だが、もう三十年も続いている読書会である。

この春の文学散歩は日帰りの桜狩りに決めて、バスをチャーターした。候補地がいくつか挙がっていたが、「置賜さくら回廊」に落ち着いた。日取りをいつにするかが大変だった。四月十五日と決めたのに、天候不順が続いて見頃がいつになるか心配になる。結局五月二日に変更して出発した。

「さくら回廊」という言葉、初めて聞いた人も多かった。観光協会からパンフレットを送っていただいて納得して出掛けた。幸い、天候にも恵まれて快適な桜狩り旅行となつて、一同足取りも軽く南陽へとバスを走らせた。まずは、伊佐沢の久保桜、草岡の大明神桜、白兔のしだれ桜、釜の越桜など、移動しながらのコースだ。どの桜も樹齢八百年、千数百年という予想をはるかに超える巨木名木に目を見張った。

「あゆ茶屋」で昼食を済ませて、午後には南陽市の「烏帽子山千本桜」を的に

しぼつての桜散策となつた。現地のガイドさんは山形弁訛りだがユーモア満点、声量申し分なしの誠を感じの良い娘さんで、可成りの花疲れもどこへやら、皆急に元気になつて笑顔一杯で大鳥居をくぐる。山は一面ちようど桜が満開だった。千本近い桜が今を盛りに咲き匂っている。見頃の桜に出会えるかと心配していたのだが、皆「良かった」と喜んで

いる。ガイドさんから「前後左右どこを見ても、咲き誇る桜、さくら。」「まるで常世の国に迷い込んだみたい!」と誰かが歓声をあげていた。そしてガイドさんからは「この山では全国各地の名木といわれる桜の苗木を集めて『桜名木二代目園』に植えて育てている」との案内。即ち、「三春の滝桜、根尾谷の淡墨桜、盛岡の石割桜」などの十七種の名木がここに移植されているという。誠にユニークな桜園の取組みに感心する。

間もなく、日本一の桜名木二代目の木々が、艶麗な花々を咲かせることになるだろう。保存会の皆様をはじめ、地域の人々のご尽力の結晶がすばらしい花となつて咲くことだろう。

『桜木を植えたし人のかたみとも千代に残らむ花の香』の歌碑の通りだと、心に染み入るものがあった。

今年は本当に予想外のすてきな桜にたくさん出会えてよかったと、帰りの

バスの中では烏帽子山とさくら回廊の桜話に大変盛り上がり、皆満足げだった。またもう一度訪れてみたいと心に強く思うこの頃である。

来園者の声

(新潟市「文学友の会」の皆さま)

◆普段何気なしに桜を見ていましたが、今度の旅で種類の多さにびっくりしました。常に目にするソメイヨシノがエドヒガン桜とオオシマザクラの交配で生まれたと考えられる雑種で、そのほとんどがクローンだということを知り、有意義な花見見学をさせていただきました。

◆京都で有名な桜守の十六代当主佐藤藤右衛門さんがおっしゃいました。ソメイヨシノは成長も早いけど、めしべは退化し花粉も実もないので自生できず、鳥も虫も寄り付かないクローン桜だと言います。それにひきかえ、実生のヒガンザクラやヤマザクラは一本一本個性があり、何百年以上も残っている古木には必ず歴史やいわれがあつて、長いこと風雨に耐えたしわくちやの幹には風格があります。自分で体を調整し、どこかを枯らしながらどこかに花をつけるんだそうです。置賜さくら回廊の老木達から、私たちに奥の深い

味わい方を教えていただいているような気がしました。「今年の満開、頑張ったネ。来年も気張ってや!」と、そつと話しかけました。そして、地域の方たちが大切に守つてくださっている年月の積み重ねがあればこそ桜だと思いました。

◆「遠く新潟から置賜さくら回廊にござらしてありがとうございます」そんな声が千本桜の樹間から聞こえたような気がした。さくらが人に愛されるのは、精一杯に懸命さを演じきるからだろうか。それだけに人には「あなたの心中も見せよ」といつているように見える。そう思うと、所を更えて「花見」などではなく、「花に見られ」に来ていることなのか。そして、さくらと語ることになる。京都の染色家の吉村さんの話にもうひとつの精一杯があつた。この方は淡い燃えるようなピンクの色をさくらの樹皮から搾り出しているという。上気したような素晴らしい色ができるのだと、詩人の大岡信さんが書いておられた。「それじゃあ、行こうか。」先達の落花一号が周りの花びら衆に声をかけたように思えた。帰りのバスの車窓に二枚の花びらが貼り付いて、会津まで来た。

◆烏帽子山さくら回廊の美しい、いいところをありがとうございました